

私と懷徳堂

井上 宏

私は平成十八年に懷徳堂記念会に入会した新参者だが、七月十一日大阪大学付属図書館で開かれた懷徳堂アーカイブ講座に参加して、驚いたというか、感服した。本欄では、まずこの驚きについて報告する。ついでこの講座を受講するに至った、懷徳堂との出会いの紆余曲折、そしてこの出会いを、私が今後どう活かそうとしているかを、記念会に対する若干の希望を含めて述べてみたい。

最初に、アーカイブ講座だが、講師はチエコ・カレル大学助教授で大阪大学文学部特別外国人研究員のヤン・シーコラ先生。テーマは「懷徳堂と日本における経済思想の成り立ち」だったが、私は、先生の日本語の正確さ・流暢さに驚いた。最近日本語の良く出来る外国人は珍しくもないが、先生は、今やほとんどの日本人にとって難解なものになっている古文書・古記録の解読もなさるようだ。日本に来て、一次史料を豊富に利用できることが嬉しかったとのこと。そこに至るには、非漢字圏の人にとって、どれだけ努力を要したことだろうか。最近になって

古文書の勉強を始め、難読している私にとって、まさに頭の下がる思いであった。

先生の所属されるカレル大学は、日本研究に於いてヨーロッパでも屈指の歴史を持つとのこと、なるほどと頷ける。大学の研究水準も高いものに違いない。

発表内容は本号に掲載されるので詳述しないが、ミルが使った意味での経済学的な考え方が近世日本でも存在したとして、懷徳堂に於ける「利」に関する議論を検討された。特に、山片蟠桃の価格決定論・市場均衡論を、科学としての近代経済学の形成過程との比較に於いて論じられるなど、興味深く拝聴した。

懷徳堂に関する外国人研究者としては、テツオ・ナジタが名高い。懷徳堂の「徳」が自然本体論に基づく主張し、また、懷徳堂が商人という階級、大坂という地域を超えて、従来考えられていた以上に広く深い思想的影響を、日本全体に与えたことを解明している。シーコラ先生は経済思想の面で、さらに深

く研究を進めておられるようだ。私も先生の発表を聞いて、懷徳堂に対する興味を一層強くした次第だ。外国人研究者のユニークな視点は貴重であり、今後の研究成果が期待される。

さて、私と懷徳堂との出会いは紆余曲折を経たものである。風が吹いたら桶屋が儲かるというか、カオス理論で言つたバタフライ・エフェクト的な所がある。私は昭和三十八年に大阪大学経済学部を卒業し、繊維会社に勤めた。学生当時、懷徳堂に関しては、百科辞典的知識は持っていたが、それが大阪大学のルーツの一つであるなどという意識は全く無かった。後年そのような記述を眼にするようになって、感書を引き継いだだけでそんな広報をするのは、ちょっとおこがましいのではないかとさえ思っていた。記念会の活動についてはもちろん知らなかった。それが最近になって懷徳堂に引き寄せられたのは何故か。三十年近く前、山本七平の「勤勉の哲学」を読んだことがきっかけである。

その後二十年近く、その本ことは忘れていた。ところが会社定年後、縁あって短期大学で教鞭を執ることになり、ビジネス関係の教科を担当した。その中で、「働く意味」について教えなければならぬ。そこで改めて、本棚に眠っていた「勤勉の哲学」をひもとき、紹介されている石門心学の考え方を参考に授業をすることとなった。それが元となって石門心学に心を惹かれ、関係図書は何冊か読んだが、在職中は忙しさに紛れ、

それ以上の進展はなかった。

私は短大勤務十年を期に退職することにした。定年には間があつたが、短命の家系故、元氣な内に自由な時間を持ちたかつたからだ。そして、やり始めたことの一つが石門心学の勉強再開である。インターネットで知つた心学明誠舎に入会した。これは一七八五年に始まつた心学を学ぶための講舎で、現在日本で活動している唯一の講舎であり、文部科学省管轄社団法人の日本第一号である。私は講演主催のセミナーに積極的に参加し、さらに、図書館や書店で心学・儒学関係の図書を漁つた。実はこの過程で懷徳堂との出会いが生まれたのである。

宮川康子著「自由学問都市大坂」の中に、「心学と懷徳堂」という一章がある。また、懷徳堂記念会編「懷徳堂知識人の学問と生」に、辻本雅史執筆「梅岩心学と懷徳堂知識人」という章がある。これらの章を読むついでに読んだ他の章から、懷徳堂の人々について知り、懷徳堂そのものに興味を持つようになった。そして、インターネットで「WEB懷徳堂」に行き当たり、記念会に入会、セミナー受講と進み、ついには、本誌を拙文で汚すに至つた。「勤勉の哲学」を読んだ三十年近く前には、予想もつかなかつた成り行きである。

この、私と懷徳堂の出会いは今後どのように進展するのか、勉強を始めたばかりで、まだ本当のところは分からない。しかし、石門心学と併せて懷徳堂儒学を、どのような形であれ勉強

していきたいとは思っている。その理由は三つある。一つは江戸時代に対する好奇心からである。江戸時代は、思想的にも文化的にも日本的なものが最も熟し、ある面では世界の先端を行つた時代と考える。日本人として、この時代のことをもっと知りたいと思つて一環に懷徳堂儒学がある。

二つは、自分という存在を見つめ直すためである。人生の終盤にさしかかり、宇宙とは何か自分とは何か、納得がいかないまま死にたくないという人は多い。私もその一人であるが、懷徳堂儒学を手がかりに答えを探せるだろうか。もちろん、懷徳堂は聖人を絶対視する但徠学に強く反対する立場なので、現代人の私が懷徳堂に全てを求めることは、かえつて懷徳堂精神に反することである。聖人に時代的な制約があるように、懷徳堂にも時代的な制約がある。私が現代の状況や科学知識の中で考えなければならぬことは勿論である。しかし、科学史家ジョセフ・ニダムが言つように、朱子学の世界観は自然科学のそれと矛盾しない。まだ勉強は浅いが、私はそのことを強く感じて驚いている。特に欧米の科学を知つた上で展開された懷徳堂儒学には、私は多くを期待できな気がしている。

三つ目は、日本の「徳育」に、今こそ儒学が出番だと思つからである。昨今の社会不安の原因は色々あるが、その一つとして、「知育」「倫理」「徳育」が不足していたことが挙げられている。今や徳の足りない大人が充満し、子どもに教え

るところではない。欧米では子どもを日曜礼拝に連れて行くぞうだ。しかし日本では、既存宗教は力を失い、エセ宗教が若者を惑わせ、最早宗教に頼れる状況にはない。一方、宗教が生きている、世界の他の地域では、不寛容な一神教の神々が悲惨な紛争をもたらしている。このよつな状況を如何に打破すべきか。私は、宗教無し（無鬼論）の道徳を目指す懷徳堂の儒学に、その可能性を見る。私は、人生の一時期、教育に携わつた人間として、それを探つていきたいと考えている。

その意味で、懷徳堂記念会に希望したいのは、これから社会を動かしていく世代、また、彼らを教育する立場にある人たちへの積極的働きかけである。Web 懷徳堂を見ると、いくつかのメニューはあるようだが、充分だろうか。少なくとも、私の参加しているセミナーで観察すると、受講者はほとんどが私同様の高齢者である。高齢化の時代、これも大変意義あることに違いないが、懷徳堂精神である「時代を拓く」役割からは、青年層に対する働きかけが一層重要であると思つ。記念会の方々の企画力に期待する。

話は変わるが、私はアーカイブ講座の後、学内のレストラン「宙（そら）」で食事をした。池を見晴らす素晴らしい眺めで、まるで高原のレストランにでも居るように、すっかり良い気分になった。キャンパス全体が、私の学生時代と様変わりに美しくなり、今の学生は本当に幸せだと思つた。ところが、このキ

ヤンパスから母親殺しの学生が出たというニュースだ。暗澹たる気持ちになった。彼はもちろん特異な例なのだろうが、現代の社会に彼のような人間を生む原因があることは確かである。

そこで提案だが、阪大のルーツが懐徳堂であると公言するのなら、阪大では全学部の教養科目で、論語を必須にする位のことをしてはどうだろうか。マナー教育などは、家庭や初中等教育の役割であり、高等教育機関の役割ではないという議論がある。しかし、「徳育」は生涯を通じて必要なものである。青年期にその基礎を作ってやるのは、大学の社会的責任ではないだろうか。阪大を「生涯徳育」の場にするには、懐徳堂の道統を継ぐことになるだろう。また、独立行政法人化の時代に、大学の特色を出すことになるかも知れない。懐徳堂記念会として、大学当局に働きかけていただけるなら、無上の喜びである。

以上、勝手なことを書き連ねたが、私は、懐徳堂との出会いに感謝し、今後の人生に活かしていきたいと考えている。